高等学校日语教材

日本历史与文化（古代篇）

日本の歴史と文化（原始から近世まで）

刘金钊◎主审 贺静彬◎主编

大连理工大学出版社
DALIAN UNIVERSITY OF TECHNOLOGY PRESS

笙学校日语教材

日本历史与文化（古代篇）

日本の歴史と文化（原始から近世まで）

刘金钊◎主审 贺静彬◎主编

郑州大学 *04010204403I*

郑州大学图书馆
2005 04
藏书

大连理工大学出版社
DALIAN UNIVERSITY OF TECHNOLOGY PRESS

© 贺静彬 2003

图书在版编目(CIP)数据

日本历史与文化(古代篇)/贺静彬主编.—大连:大连理工大学出版社,2003.7

高等学校日语教材

ISBN 7-5611-2344-2

Ⅰ.日… Ⅱ.贺… Ⅲ.日语—高等学校—教材 Ⅳ.K313.0

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2003)第 016027 号

大连理工大学出版社出版

地址:大连市凌水河 邮政编码:116024

电话:0411-4708842 传真:0411-4701466 邮购:0411-4707961

E-mail:dutp@mail.dlptt.ln.cn URL:http://www.dutp.cn

大连理工印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸:140mm×203mm 印张:9.5 字数:236 千字

印数:1~3 000

2003 年 7 月第 1 版 2003 年 7 月第 1 次印刷

责任编辑:王佳玉 于福岳 责任校对:樱 梅

封面设计:王福刚

定 价:18.00 元

前　言

日本文化虽然是东方文化传统的产物，但是却独具特征。如果要用一句话来概括日本文化的特征，似乎可以说日本文化更追求内涵。所谓内涵，似乎可以解释为精神。因此可以说，日本文化与辉煌的外表相比更重视精神，应该说日本文化是一种精神文化。举个例子来说，表现日本文化特征的“もののあわれ”、“わび”、“さび”等词汇，其深刻含义究竟何在？究竟表现了日本人的一种什么精神？对于这个问题，即使是学过多年日语并了解日本文化的人，恐怕也是一时难以琢磨透的。因为精神是看不到、摸不着的，只有通过长期体会才能深刻领会。

一般来说，文化是在历史发展的过程中不断形成的。当然，日本文化也不例外。要深刻理解当代日本文化，学习、研究日本历史恐怕是必经之路。否则，对当今日本文化的理解只能停留在肤浅的表面，最多也不过是知其然不知其所以然。尤其是精神方面的东西，决不是一朝一夕才能形成的，更需要我们去追本求源。举一个大家都熟知的例子，我们常说要学习日本人的团队精神。确实，

日本人总是愿意把个人置于团队之中，孤掌难鸣，孤雁难行，这种思维观念在日本人的头脑中早已根深蒂固。今天，日本人表现出来的这种团队精神，有其深刻的历史根源。有资料记载，说是日本人的团队精神始于稻作（弥生时代），因为种植水稻需要团结协作，互相配合才能完成，这样才逐步养成了团队精神。我个人认为，其道理恐怕并非如此简单。试问，我国历史上也应该经历过稻作时期，我们也应该养成团队习惯，为什么今天要向人家学习呢？其实，日本人团队精神的形成背景是很复杂的，原因也是多种多样的，其主要原因并非稻作。日本人受中国传统的儒教思想影响颇深，孔子的中庸之道成为许多日本人，特别是老一代日本人的行为准则。"人怕出名，猪怕壮"和"树大招风"（出る杭は打たれる）是许多日本人的处世哲学。把个人置于集体之中，这样更有安全感，可以说这是日本人团队精神的思想基础。再举一例，我们常评论说，日本人对待工作态度十分认真，办事计划性强，循规蹈矩等等。可以说，这是日本民族的显著特征之一。有研究证明，自古以来，日本人"权者顺从"的思想倾向严重，尊重"秩序"，喜于把自身置于"框框"的束缚之下。这些行为都与历史紧密相关，割断历史，空谈现象，当然只能成为茶余饭后的闲聊，谈不上学习与借鉴。

众所周知，文化是语言赖以生存的土壤，缺少文化底蕴的外语即使学得再好，也难以灵活得体并恰当准确地应用它。而本书是以有一定日语阅读能力者为对象编写的，通过阅读这本《日本历史与文化（古代篇）》，可以纵向地了解日本社会以及文化的发展，在扩大知识面、深层次接触日本社会、风俗、文化的同时，又能提高语言水平，丰富词汇量。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本书由原始古代、中世、近世三个部分组成，其特点为：

一、内容简明扼要，重要史实突出。

二、史料丰富，每个章节后都有与该章节相关的历史史料，有些内容还配有解说。

三、人物突出，在栏专门介绍每一章节中的主要人物。

四、标注清晰，对人名、地名及生词、偏词等都注有假名，以求学生能准确、轻松掌握。

编写这部《日本历史与文化（古代篇）》，目的是通过历史看现在，通过历史理解现代现象，从而有的放矢地学习与借鉴，并加深对日本的全方位了解和对日语的进一步理解，希望能够实现这个初衷。

本书曾经过几年教学实践，并做了大量的修改与补充，以求臻完善。当然，错误和不足在所难免，敬请批评、指正。

编　者

2003 年 3 月

目　次

第一篇　原始・古代 …… 1
第一章　日本文化の始まり …… 2
1. 原始社会の生活と文化 …… 3
2. 水稲農耕の普及と社会の変化 …… 9

第二章　古代国家と東アジア文化の摂取 …… 22
1. 大和政権と東アジア文化の影響 …… 23
2. 推古朝の政治と飛鳥文化 …… 32

第三章　律令国家の形成と古代文化の発達 …… 51
1. 律令体制の成立と白鳳文化 …… 52
2. 奈良朝の政治と天平文化 …… 58
3. 平安時代初期と弘仁・貞観文化 …… 66

第四章　貴族政治と国風文化 …… 92
1. 荘園の発達 …… 93
2. 摂関政治と日本国風文化 …… 94
3. 武士の成長と源氏の台頭 …… 104
4. 院政・平氏政権と日本国風文化の展開 …… 105

第二篇　中世 …… 129
第五章　武家政治の成立と中世文化の形成 …… 130
1. 鎌倉幕府の成立と封建社会 …… 131
2. 執権政治 …… 134
3. 鎌倉文化 …… 140
4. 元軍の襲来と幕府の衰退 …… 146

第六章　武家社会の成長と中世文化の展開 …… 166
1. 室町幕府の成立 …… 166
2. 社会の変化と民衆の成長 …… 175
3. 室町時代の文化 …… 177

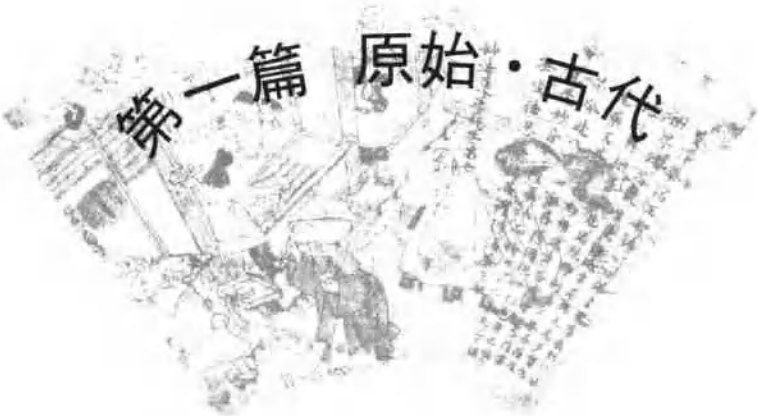
第三篇　近世 …… 201
第七章　幕藩体制の確立と近世文化の興隆 …… 202
1. 織豊政権 …… 203
2. 桃山文化 …… 208
3. 幕藩体制の成立と鎖国 …… 211
4. 経済の発展 …… 219
5. 元禄文化 …… 223

第八章　幕藩体制の動揺と近世文化の成熟 …… 254
1. 幕政の改革 …… 255
2. 化政文化 …… 260

付　録 …… 279

主要参考文献 …… 296

第一篇 原始·古代



第一章　日本文化の始まり

概観

人類の遠い祖先が地球上に現れたのはいまから400万年以上も前のことと言われる。人類が出現してからも、地球上は気候の周期的変化のため、北半球の大陸の大部分が数回にわたって氷河におおわれたが、その間に人類は、石を打ちかいた石器をつくり、火を使いはじめた。日本列島は中国の北京原人が使用したものに近似した20万年近く前のものと思われる石器が発見されている。

約1万年前ごろ、最後の氷期が終わり、気候が温暖になり始めると、中国でも日本でも、石器のほかに土器をつくりはじめたことが、最近の研究で明らかにされている。日本のこの縄文文化は、約8,000年つづいたが、その間、中国ではすでに約6,000年前ごろ、華中で稲作が行われており、約4,000年前には黄河流域で古代中国文明がおこり、やがて青銅器、ついで鉄器の文明が栄えた。この水稲農耕は、縄文晩期に九州北部に伝わり、やがて日本に弥生文化がおこって、鉄器・青銅器も朝鮮半島をへて伝入した。水稲農耕や金属器の使用が本格化して、日本

の社会は大きく変化し、文明の夜明けを迎えたのである。

1. 原始社会の生活と文化

◎日本人の祖先

1949(昭和24)年の夏、群馬県新田郡笠懸村岩宿の丘の切通しで、地元の考古学青年相沢忠洋が、それまで遺物をまったくふくまないと考えられてきた関東ローム層のなかから、人間が加工したとみられる槍先のような形の石をみつけた。この発見により、土器をともなう縄文文化を日本最古の文化とするそれまでの常識はくつがえされ、日本に旧石器文化のあったことがあきらかになった。岩宿遺跡出土の石器は2万4000年以前にさかのぼるとみられ、これをつくった人は、現代人の直接の祖先であるクロマニョン人と同じ段階の人類と考えられている。

その後、今日までに発見された旧石器時代の遺跡の数は、日本全国で3,000カ所にもおよんでいる。なかでも宮城県の座散乱木遺跡・馬場壇A遺跡の発掘は、日本の旧石器時代をさらにさかのぼらせることとなった。まず、1976(昭和51)年から発掘がはじまった座散乱木遺跡では、4万年以上も前のものとみられる打製石器が発見された。そのにない手は、年代から考えるとネアンデルタール人と同じ旧人だった可能性がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1985(昭和60)年、宮城県の馬場壇A遺跡では、20万年前にさかのぼるとみられる地層から打製石器が発見された。これにより、日本にもピテカントロプスや北京原人のような原人の段階の人類が生活していた可能性がでてきた。また、馬場壇A遺跡の11～14万年前の地層から出土した石器には、動物の骨や肉・皮を加工したり、調理したらしい痕跡がみうけられたり、その石器に付着していた脂肪の種類を科学的な分析によって調べた結果、ナウマン象やオオツノシカの脂肪ににていることもわかった。このことから、これらの石器を残した人々が、大型動物をとらえて食料としたり、皮や骨を利用したようすが具体的にわかるようになったのである。

このように、最近の考古学の進歩は、日本人の祖先をより古い時代へとさかのぼらせ、その生活の具体的な姿をあきらかにしつつある。

◎日本列島と日本人

地球上に人類が誕生したのは、今から約400万年前で、人類は地質学でいう更新世の時代をつうじて発展した。更新世は氷河時代ともよばれ、海面は現在より100m以上も低いときがあった。

そのころ、日本列島はアジア大陸と陸続きになり、北からはマンモスやヘラジカ、南からはナウマン象やオオツノシカがやってきた。人類もこれらの動物を追いかけて大陸から渡ってきたらしい[1]。

人類は、猿人・原人・旧人・新人の順に進化したが、日本列島で発見された化石人骨は、愛知県の牛川人が旧人段階と考えられるほかは、新人段階のものが多い[2]。これらの人骨の特徴は、中国南部の化石人骨とよくにており、のちの縄文人にもうけつがれている。

日本人の原型は、このようにアジア大陸南部の化石人骨に求めることができ、日本列島が大陸と切りはなされた縄文時代に、若干の変化を加えながら、弥生時代以降に渡来した人々との混血をくりかえして、現在の日本人が形成されたと考えられる。

◎旧石器文化

日本列島は、アジア大陸の東方海上に弓状につらなり、大陸とは海によって隔てられている。この列島は、長い時間をかけて、しだいに今日の地形に近い形を作っていったが、地質学でいう更新世(洪積世＝氷河時代)の氷期には、海面が下降して、大陸と地つづきとなった。

更新世の時代は考古学上の旧石器時代に相当し、その文化を旧石器文化という。かつては、旧石器文化は日本列島に存在しなかったと考えられていた。しかし、岩宿遺跡の発見後(1949年)、各地で更新世の地層から、簡単な加工をした打製石器が発見され、最近では20万年近く前にさかのぼると思われるものすら発見されている。

旧石器時代人は、断崖の下の岩かげや洞窟の入口近くに住み、握槌やナイフ状の石刃などを用いて、狩猟や植物採集を行い、火を利用して生活していた。この時代の人骨が、愛知県の牛川、沖縄県の港川、静岡県の三ケ日などから発見されている。

◎縄文文化

更新世から完新世(沖積世)になると、人類は新石器時代に入り、土器も作り始めた。日本の土器の起源は古く、約1万年前にさかのぼり、それから約8,000年間つくられた黒褐色のもろい土器を、縄文土器とよび、この時期の文化を縄文文化という。

はじめは深鉢形の尖底土器がつくられたが、長い間にかめ形や土瓶形など種類が増え、把手なども発達し、文様も複製化していった。石器では、打製石器が現れ、石斧、石錘など狩猟や漁撈の道具が豊富に作られた。また骨角製の釣針、銛や弓矢も使用されており、生活の多様化した様子がうかがえる。

◎縄文時代の生活

縄文時代の人々は、床が地面よりも低い竪穴式住居をつくって生活した。住居の中央には炉があり、一つの住居にふつう5～6人が寝起きした。集落は日当たりのよい台地に形成され、台地の裾の湧水を飲料水に利用した。ふつう数軒の住居が集まって

集落をつくったが、のちには広場をかこんで10数軒の住居が環状に並ぶ大きな集落もつくられるようになった。

貝がらなど、食料ののこりかすなどが集落の外側に捨てられ、貝塚[3]かできあがった。また、集落の一角に木の実などをたくわえるための貯蔵穴が群集していることから、収穫物を共同で管理していたことがわかる。

人々は、集落近辺で狩猟・漁撈・植物採集の自給自足の生活を営んでいたが、石器の原料となる黒曜石（火山岩の一種）やサヌカイト（讃岐石、安山岩の一種）、装身用具の硬玉など、近くに産出しない物資は、遠隔地に出かけて採取するか、または交易によって手に入れた。

一般に東日本の集落遺跡の密度が高く、人口が西日本に比べて多かったのは、自然環境のちがいから食料資源に比較的恵まれていたためと考えられる。

◎縄文時代の社会と信仰

縄文時代の社会は、数千年の長期にわたってゆるやかな発展をたどった。その間、食料獲得の技術が進歩したことや、人口が増加したことは、集落の規模の拡大や数の増大から推測することができる。しかし、採集経済における技術の進歩は、乱獲による資源の枯渇の危険をともなうので、狩猟動物の乱獲規制もおこなわれたと考えられる[4]。また、自然条件が悪化すると飢餓[5]にみまわれることもあり、一般に平均寿命は短かった[6]。

貝塚や住居跡などに残された遺物からみて、縄文時代の人びとは、狩猟、漁撈や植物採集によって生活し、それに便利な海、川、湖沼に近い台地や山間に竪穴住居の集落をつくっていた。縄文中期以降には、植物の種子をまくだけの原始的な農耕も行っていたと見られる。

人びとは、骨角、貝殻、ひすいなどで作った腕輪や首飾り、耳飾りなどで身を飾り、成人を示す抜歯も行い、門歯に刻みを入れ、また女性や動物をかたどった土偶を作ったりした。これらの風習は、魔よけ、また病気を治すための呪いといわれている。また、手足を折り曲げて埋葬する屈葬も行われた。

住居の規模や葬法などにあまり差異がないので、まだ社会に上下、貧富の差がなかったと見られる。また、特定の場所に産する石を材料とした石器が、かなり離れた地域から発見されるので、広い範囲にわたって交易がなされていたことがわかる。

◎縄文農耕論

土掘り用の打製石斧が存在することや定着的な集落が発達することから、縄文時代に原始的な農耕があったとする学説がある。植物質食料の比重が高いことは一般に認められているが、縄文時代全般について、本格的な栽培技術が存在したかどうかについては意見がわかれている。また、佐賀県菜畑遺跡や福岡県板付遺跡で縄文時代晩期とみられる水田跡が発見されたことから、この時代の末期には稲作をおこなっていたとする説も出されている。

2. 水稲農耕の普及と社会の変化

弥生文化　紀元前4世紀の後半、北九州で大陸の影響を受けた新しい文化が起こり、短期間のうちに東方へ広がって、縄文文化と交代した。この文化は、縄文土器よりも一般にやや高い温度で焼いた赤褐色の弥生土器をともなうので弥生文化という。それは紀元3世紀ごろまで続いたが、この時代に水稲農耕と金属の使用が本格化し、日本の社会は大きく変化した。

弥生文化は、水稲耕作と金属器の使用を特徴とし、土器も赤褐色の弥生土器[7]にかわった。青銅器や鉄器の金属器、木材加工用の石斧や稲の穂をかりとる石庖丁などの磨製石器の製作、機織りの技術などは、中国や朝鮮半島から伝えられたものである。また、西日本で発見されている弥生人骨のなかには、縄文人にくらべて背が高く、朝鮮半島の人々に近い要素もみられる。いっぽう、竪穴住居の構造や土器・打製石器の製作などには、縄文文化の伝統がうけつがれている。弥生文化は、日本在来の縄文文化と中国や朝鮮半島からきたあたらしい文化とが接触・融合して、うみだされたものと考えられる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com